

難波西鶴と 海の道

【21】

森田 雅也

西鶴の『日本永代蔵』
〔元禄元(1688)年刊〕にも酒田の繁栄ぶりは描かれてい

「巻二の五」舟人馬かた鏡屋の庭」は一章まるごと酒田の豪商「鏡屋」の様子を描かれます。しかし、その書き出しは北国の雪深さの描写から始まりま

「北国の雪平、毎年雪丈三尺降らぬと云う事なし。神無月(10月)の初めより、山道を埋つみ、人馬の通ひ絶えて、明の年の遅繁(次の年の2月15日)の頃までは、おのづからの精進して、塩鱈売の声を聞かず」とし

は4カ月弱、雪で道が閉ざされて、鮮魚どころか干物も手に入られず、いやが応にも、精進の生活を送っているというのです。

さらに「薪桶の用意、焼火をたのしみ、隣むかひも音信不通になり、半年は何もせず、明暮煎じ茶にしておくりぬ。諸事を兼々たくはへ置きし故に、湯命に及ばざりき」とする

よつに、北国の冬は漬物を用意し、家にもこもり、近所付き合ひもなく、半年、安い煎じ茶ばかりを飲んで過すのです。生き永らえることができるのは、いろいろな物の善えがあるからとたというので

酒田の繁栄ぶり「日本永代蔵」にも



「日本永代蔵」巻二の五「舟人馬かた鏡屋の庭」(関西学院大学図書館所蔵)

へ、馬の背ばかりにて荷物をとらば、万高直にして、迷惑すべし。世に船程、重宝なる物はなしと結ぶよつに、高価な荷駄馬に頼るより、流通手段は船に限る。なるほど、この地に限らず、世の中に船ほど便利な物はないのだと宣言するのです。

「表口三十間(54メートル)、裏行六十五間を、家蔵に立ちつづけ、台所の有り様、目を覚ましける。米・味噌出し入れの役人(係)、焼木の請け取り(係)、肴奉行(魚係)、料理人、櫛家具の部屋を預り、菓子の手配、たばこの役、茶の間の役、湯殿役、又は使番の者も極め、商手代(表店の担当の手代・営業)、内證手代(店の家事担当の手代)、金銀の渡し役、入り帳の付け手、諸事密人に密役づつ渡して、物の自由を譲りける」とするよつに、ただ、栄えているのではなく、適材適所、無駄なく働いている様子が浮かびます。挿絵は、右の文章通り、よく対応していますね。でも、問屋は旅籠屋と同じだったのでしょうか。次回に説明します。

ここに坂田(酒田)の町、酒田の鏡屋惣左衛門の家の繁栄ぶりが描

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

適材適所 無駄なく働く